

詐欺師フェーリクス・クルルの告白

回想録第一部（上）

*本PDFは『詐欺師フェーリクス・クルルの告白（上）』

（2011年8月光文社刊。本体1048円＋税）の本編のサンプル版です。

株式会社光文社の許可なく本ファイルを販売・改変することは著作権法違反となります。また、本ファイルのコピー・転載はご遠慮ください。

*本編とは一部ページ順が異なります。

光文社 古典新訳 文庫

詐欺師フェーリクス・クルルの告白(上)

マン

岸 美光訳



光文社

Title : Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull

1954

Author : Thomas Mann

目次

詐欺師フエーリクス・クルルの告白

回想録第一部（上）

読書ガイド

岸美光

第一卷

第一章

こうしてペンを取り、隠棲の身の気晴らしに、——隠棲とは言っても体のどこかが悪いというのではない、ただ、疲れている、その疲労甚だしく、ほんの少しずつ、頻繁に休息を挿まなければ筆を進められないだろうと思うのだが、このすつきりとして見た目に心地よい、私ならではの筆跡で、紙という、嘘も真も黙って受けとめてくれる忍耐強いものに、わが告白の種々を、今しも委ねようというこの時に、心にと疑いの影が忍び寄る。自分の素養と修練は、この精神の企みに追いつかないのであるまいかと。だがしかし、伝えねばならぬことはすべて、他ならぬこの私自身の直接の経験と過ちと情熱から出たこと、つまり、私の材料は私が完全に握っているのであるから、あの疑いはせいぜい、表現がマナーに適い端正であるかという点だけにある。それなら私にはお手ものだ。私の見るところ、こういう問題なら、お決まりの

大学教育をぶじ終えるより、もって生まれた才能と育ちの良さこそが決定的なのだ。これこそわが取り柄、なぜなら私は上流市民の家庭の出なのである、自由が放恣に流れる家ではあったが。私は誕生後数ヶ月、姉のオリュンピア共々、ブベー出身のベビーシッターの手に委ねられたが、その娘は御多分に洩れず、母との間に女同士のライバル関係を引き起こし——私の父をめぐってである——、解雇の憂き目をみた。私の洗礼に立ち会った代父シメルプレースターは評判の高い芸術家であり、私はこの人とは非常に親密な関係にあった。小さな町の誰からも「教授」と呼ばれていたが、その人がこの美しくも望ましい称号を職務上その身に帯びたということは、おそらく一度もなかっただろう。さて私の父であるが、でっぷりと太ってはいたものの、その人となりには有り余るほどの優美さを具えており、いついかなる時も選り抜きの明晰なもの、言いこそ大事と心得ている人間だった。父は祖母からフランス人の血を受け継いでおり、自身フランスで修業時代を過ごし、その断言するところによれば、パリはチヨッキのポケットも同然によく知っていたそうだ。そして「そのとお^セり」とか、「おみ^エごと^バ」とか、「かん^{バル}ぺ^{フェ}き^ト」とかいう言い回しを——それも見事に完璧な発音で——会話に滑り込ませることを好んだ。また時々「それなら私^{イッヒ・グテ・アイレ・ダス}も嗜みますな」な

どと言ひ、ほとんどその人生の終わる頃まで女性たちのアイドルであり続けた。これは、さしあたり余談として言っておくだけのことである。しかし良き形式に対する私の天性の才能に話を戻せば、これはもう詐欺師としての私の全人生が証明するとおり、以前からこの点には絶対の自信があつて、こうして回想録をものしようという企てにもこれこそが頼みの綱と信じて疑わない。ついでに言っておけば、この手記を書くにあたってはどこまでも大胆率直、自惚^{うぬほ}れだの恥知らずだのという非難は一顧だにしない覚悟である。嘘偽りなくという以外の観点でまとめられた告白録などにどんな意味があるだろうか。そんなものは道徳的に見てなんの価値もない！

私を生んだのはラインガウの地である。氣候も地勢も穏やか、厳しさ陰しさなど微^み塵^{じん}も知らない天恵の地で、小さな町や村落に富み、人心は陽気、多分、およそ人の住む限りこの地上の最美最善の地の一つに数えられよう。ラインガウの山々によつて激しい風から護られ、真昼の陽光にのんびりと手足を伸ばすかのように、その名を聞けば大酒飲みの心も笑うあの有名な町々が、この地に拓^{ひら}かれ栄えたのである。ラウエンタール、ヨハニスベルク、リューデスハイム。そしてドイツ帝国の輝ける創設から数

年後に私がこの世の光を仰いだあの尊い町も、この地にあった。ライン川はマインツに達して大きくカーブするのだが、そのカーブの少し西方、シャンパン製造で有名なその町は、ライン川を上り下りする蒸気船の主要な発着地であり、住民およそ四千人を数える町である。陽気なマインツはすぐ近く、ヴィースバーデン、バート・ホンブルク、ランゲンシュヴァルバッハ、シュランゲンバートのようなタウヌスの一流の温泉地も近かった。シュランゲンバートなどは狭軌鉄道に乗って三十分もあれば行けたのである。美しい季節になると私たちはどれだけ遠出をしたことだろう、両親と姉のオリュンピアそれに私、ときに船に乗り、車に乗り、また鉄道を使って、東西南北あらゆる方角へ。と言うのも、至る所で自然と人の知恵が生み出した魅力と名所が私たちを招いていたからである。今でも、ゆったりした細かいチェックのサマースーツを着て、どこかの宿の庭園で私たちと寛ぐ父の姿が目^{くろ}に浮かぶ——せり出した腹のせいでテーブルから少し離れて座っている——。そして心の底から楽しそうに、黄金色のシャンパン片手にエビの料理を楽しんでいる。代父のシメルプレースターもしばしば同行した。そして丸縁眼鏡の画家の目で土地と人々を鋭く探るように観察し、大事も小事もそれぞれにその芸術家の脳裡に書き留めていた。

気の毒な父は、今では消えてしまったシャンパンの銘柄「ローレライ・エクストラ・キュヴェ」を生み出したエンゲルベルト・クルル商会の所有者だった。ライン河畔の上陸用棧橋からほど遠からぬ所に商会の貯蔵庫があった。子供の頃はよくそのひんやりしたアーチの下を歩き回ったものである。背の高い支持枠の間を縦横に走る石畳の通路をもの思いに耽りながら辿り、半分傾けて積み上げられた瓶の山を眺めた。そんなとき心に思ったことはこうである（もちろんその頃はまだこんなふうに適切な言葉で自分の考えをまとめることはできなかったが）。地下の薄暗がりには横たわるお前たち、君たちの中で泡立つ黄金の液が静かに澄んで熟していく。それはやがて人々の鼓動を高鳴らせ、人々の目を見開かせ、さらに一段と輝かせるだろう！ 今のところ君たちは何の飾りもなくみすばらしい。しかしある日、君たちは見事に装って上の世界に昇るのだ。祭りの時、婚礼の席、特別な小部屋で、君たちの栓を華やかに音たてて天井に跳ね上げ、人々を酔わせ、陽気に楽しませるのだ。子供はそんなことを心に語ったのである。そしてそれがあながち間違いはなかったことに、エンゲルベルト・クルル商会は瓶の外見、その道の人が「被り物」^{コワフユール}と呼んでいる究極の外装に並々ならず拘^{こたわ}っていた。ねじ込まれたコルクは銀の針金と金色の結び紐で固定されて上

から深紅のワニスで密閉され、さらにその上から、教皇勅書や古い国の公文書に見られるような仰々しい丸形の印章が、金の紐に結ばれて麗々しく下げられていた。瓶の首には輝くスズ箔がたっぷりと被せられ、膨らんだ胴には渦巻き装飾を施した金色のラベルが光っていた。これは私の代父シメルプレースターが商会のためにデザインしたもので、そこには数個の紋章と星形、父の名前と「ローレライ・エクストラ・キューエ」のブランド名を組み合わせた金文字刷りの他に、腕輪と首飾りだけを身につけた女性が一人、岩の先端に脚を組んで座り、腕を上げて波打つ髪を梳かしている姿が認められる。ところで、この眩いばかりの装飾はワインの質とまったく釣り合わなかったようである。「クルル」と、代父シメルプレースターが私の父にこう言っただろうことは容易に考えられる。「あなたを貶めようというのではないが、お宅のシャンパンは警察が取り締まるべきですな。一週間前、ついとうっかり半分ほど空けたのですが、手酷くてひどくやられて、きょうに至るもまだ快復しておらん。いったいどんなインチキを混ぜ込んだらこの安酒になるのかな。配合のとき加えるのは石油か、それともフーゼル油か？ 要するに毒物混合だ。法律を恐れるがいい！」こう言われて気の毒な父はただ困惑したのだ。なぜなら父は、厳しいものの言いには耐えられない柔弱な人

間だったから。「あなたはどんな悪口でも言えますよ、シメルプレースター」おそらく父はそう答えたのだ、長年の習慣で、太った腹を指先で摩りながら。「でも私は安く造らねばなんのです。地場の製品は安いものだという、そういう先入観があるのですから。――要するに私は、大衆がこうと思うものを提供しているのです。それだけではない、競争にも脅かされていますよ、君。持ち堪えるのも難しい次第で」。父の返答はこんなところだ。

一家の邸宅は、ライン河畔一帯の景観を見晴らす緩やかな斜面に建つ、あの資産家たちの優雅な屋敷の一つだった。傾斜した庭は、陶土を焼き固めて作った小人やキノコ、本物と見紛うばかりの種々様々の昆虫で飾り立ててあった。台座に載ったガラスの球体があつて、それに顔を映すと奇妙に歪んだ。エオリアン・ハープ¹だの複数の人造洞窟だの噴水だのもあつて、その噴水は複雑な図形を空中に放ち、水盤には銀色の魚が泳いでいた。家の内部に話を移すと、そこは父の趣味によつて心地よく明るく設えられていた。出窓を備えた張出し部分は思はず座つていたくなるような寛げる場所で、その一角には本物の紡ぎ車が据えてあった。飾り棚とフラスコ天張りの小テーブルの上には、陶器の小さな置物や貝殻、鏡を張った小箱や香水瓶が整然と置かれ、

ソファ―と寝椅子の上には至る所、たくさんのダウンのクッションが、シルクに包まれ、あるいはまた色とりどりの刺繡を施されて配置されていた。私の父は柔らかく包まれて横になることを好んだのである。矛槍^{ほこやり}がカーテンを支え、戸口には、紐に通した色真珠とヨシから成る軽い遮蔽の幕が取り付けてあり、そこは一見固い壁があるように見えるのだが、手で掃^{はら}うこともなく通り抜けられる。そのとき幕はかさこそと微かな音をたてて二つに分かれ、再び閉じるのである。玄関の風よけスペースには、上部に小さな意味深長な仕掛けがあった。これは、開かれていたドアが空気圧でゆつくりと戻って施錠されるまでの間、涼やかな音色で「楽しい人生²」という歌の冒頭を奏するのである。

1 風に吹かれてひとりでに鳴り出すハーブ。

2 作詞はスイスの詩人ヨハン・マルティーン・ウステリ（一七六三―一八二七）、作曲は同じくスイスの作曲家ハンス・ゲオルク・ネーゲリ（一七七三―一八三六）。民謡風の素朴な歌である。歌詞の冒頭に曰く、「楽しい人生／灯火^{ともぎ}の消えぬ間に、／摘み採れ薔薇^{ばら}を／その色の褪^あせぬ間に」。

第二章

これがつまり、私が歎びの月、とはすなわち五月の温かい雨の日に——おまけに日曜日だった——生まれたところの家である。そしてここからは先走るのをやめて、慎重に時間の経過を辿っていこうと思う。私の誕生は、後日教えられたことが正しければ、ゆっくりとゆっくりとしか進まず、当時の家庭医だったドクター・メークムの人為的なサポートなしには終わらなかった。しかもそれがもつぱら私のせい——あの最初の異様な生き物を「私」と呼んでよければ——、その私は誕生の時、異常に不活発で無関心な動きしかせず、母の努力をほとんどまったく支えもしなければ、この世に出ることにほんの僅かな熱意さえも見せなかったそうである。後になればあれほど熱烈に愛してやまなくなる人の世なのに。そんなことはあったが、私は健康で姿の良い子供だった。申し分ない乳母の胸ですくすくと育って将来有望の片鱗を見せた。

しかし繰り返しつらつらと考えてみるに、生まれてくる時の気乗りのしないさも嫌そうな態度、母胎の闇を明るい光と交換することに対するあからさまな不快感というのは、子供の頃から私の特徴であった眠りに対する異常な愛着、眠りの天分とでも言うべきものと深く関係していると思わないではいられない。後から聞かされた話によれば、私は物静かな子供で、聞き分けのない泣き虫だったことなど一度もなく、すやすやと、またうつらうつらとよく眠り、およそベビーシッターたちの手を煩わせることがなかったそうである。長じて世間と人間に焦がれるあまり、様々な名前を使って人の世に立ち交じり、また人の好意を得んがために枚挙に暇がないほどのことをしてきたが、そんな時でも夜は必ず自分の家でぐっすりと眠った。体が疲れていなくても眠りにつくのは楽しく簡単、夢さえ見ない忘却の淵に深く沈んで、十時間、十二時間、いや十四時間にも及ぶ長い睡眠の後には心身爽快に目覚め、昼間どんな成功を収めて快哉を叫んだよりも満ち足りた気持を得たのである。この異常な睡眠欲は、私を駆り立てた法外な生きる欲望や愛欲と矛盾していると思われるかも知れないが、それについてはいずれ適当な場所で語るつもりである。しかし私は既に、この点について繰り返しつらつらと考えてみたことを告白した。そして何度考えても、これは対立

ではなく、むしろ二つのことは密かに繋がっていて実は一つなのだと、自分としてははっきりそう理解したと思うのである。つまり私はいま、やっと四十歳だというのに、はや老残の気分で疲れており、人を求める熱い気持ちに駆られることもなく、もっぱら自分自身の上に蹲うずくまって日を重ねているのだが、そんな今になって初めて私の眠りの力も萎なえ、いま初めて私は、いわば眠りから隔てられた。私のまどろみは短く、浅く、かりそめのものになった。以前は、眠る時間がたっぷりあった刑務所の中でも、おそらくパラストホテルの柔らかなベッドの midpoint に、ずっとよく眠っていた私であったのに。——しかしまた懲りもせず、先走りの愚を犯したようである。

親族の口から繰り返し聞かされたことであるが、私は日曜日の子供、つまり幸運児だったそうだと。およそ迷信などというものに縛られないように育てられたのだが、それでも、ファーストネームがフェーリクス、つまりラテン語で「幸福」だったり（代父シメルプレースターの名に因ちなんだ命名である）、体の造りが上品で見目麗しかったせいもあって、私はこの事実について特別に神秘めかした意味を与えずにはいられなかった。じっさい自分の幸運への確信、自分が天の寵児であるという確信は、心の内奥にいつもいきいきと宿っていて、総じてこれが虚言の咎とがを受けたことはないと言言できる。

なにしろこれこそが私の人生の際立った特徴を成していて、人生の悩み苦しみは、どこまでも私には無縁のこと、そもそも摂理の意図に反したこととしてしか現れず、仮にそんな最中^{さなか}にあったとしても、必ずや私の本当の本来の天命がいわば太陽のように輝き出てしまうのである。——話が一般論に脱線してしまったが、子供の頃の素描を続ける。

空想癖の強い子供であつた私は、いろいろな思いつきや想像で家の人たちを大いに楽しませた。この記憶に間違いはないと思うし、また人からもよく聞かされたのだが、私は、まだベビー服を着ていた頃から、王様ごっこが大好きで、何時間でも自分は皇帝だと固く信じ続けていた。付き添いの女中が私を小さなベビーカーに乗せ、庭の小道や玄関のホールに連れ出してくれたのだが、そんなとき私はある魂胆^{こんたん}から、上唇が異様に引き延ばされるほど口をできるだけ下に引き下げ、ゆつくりと瞬きをした。すると目は、顔を歪めたせいばかりでなく、心に溢^{あふ}れる感動のあまり赤みを帯び、涙が溢^{こぼ}れた。威厳に満ちた老人であるという思いに胸を一杯にして、私は黙ってベビーカーに座っていた。しかし女中は行き会う人ごとに事情を説明しなければならなかった。私の奇妙な思いつきを無視したら、私が激しく怒りだす恐れがあつたからである。

「陛下のお散歩に随したがっております」と女中は言った。そう言いながら、いかにも慣れない様子で手の平を顚顚こめかみに当てて敬礼した。すると誰もが私に敬意を表した。なかでも代父のシメルプレースターは、何かと茶番に傾くきらいのある人だったので、そんな私に出会うと、喜んで私の意を迎え、あらゆる手を尽くして私の自惚れを掻き立ててくれた。「諸君、陛下のお出ました。老いたる英雄を見よ！」そう言って、不自然なくらい深く身を屈かがめた。それから民衆の一人として私の進む道の縁に立ち、万歳を叫んで帽子とステッキと、眼鏡さえも空高く投げ上げた。そして私が感動のあまり左右に引つ張った上唇の上に涙を流すと、息が止まるかと思うほど笑ったのである。

この種の遊びはこの後の少年時代にも習慣になった。大人の協力などは恐らくもう期待できない年齢ではあるのだが。しかし私はそれを残念とは思わなかった。それどころかむしろ自分の想像力を誰にも邪魔されず心行くまで楽しんだのである。たとえばある朝目覚めて、今日は十八歳の王子だと決意する。名前はカール。そしてこの夢想に一日中熱中するのである。それが数日に及ぶこともある。なぜならこの遊びは、どんな時も、あの苦痛極まりない授業中でさえ中断される必要がなかったという点で、計り知れない価値があったからである。なんとかいう愛すべき殿下に扮して歩き回り、

想像で付け加えた総督や副官と陽気で活発な会話を試みる。自分が貴顕の優雅な存在であるという秘密が私の心を満たした誇りと満足は何人の筆も及ぶところではない。空想とはなんと素晴らしい才能ではないか。なんとという喜びを与えてくれることか。明らかにこの能力に恵まれていない町の子供たちが、なんと愚かに劣って見えたことか。なにしろ彼らは、私がどんな実際の準備もなく、簡単な決心一つで苦もなく引き出すことのできた秘密の喜びを知らなかったのだから！ もっとも、硬い髪と赤い手をしたそこらの小僧たちには、自分が王子様だと思い込むのは無理があつたし、思い込んでもおよそ不似合いで滑稽なことになっただろう。しかし私の髪の毛は、男性には滅多に見られないことだが、シルクのように柔らかだった。そのブロンドの髪は灰青色の目と共に、金色がかった肌の褐色と、人の心を魅するばかりに引き立てあい、そのために、そもそも私はブロンドなのかブリュネットなのか外見上わからなくなり、それはどちらとも言えたのである。自分でも子供のころから大事にしていた私の手は、華奢に過ぎることがなく、実に上品な造りで、汗でべたついた感じがなく、程よく温かく乾いていて、爪の形も趣味が良かった。つまり自分自身大満足だったのである。さて声とは言え、すでに声変わりする前から、耳に心地よいところがあつて、

私は一人の時に、姿の见えない総督と、ジェスチャーたつぷりに、支離滅裂ながらさも意味ありげなお喋りに興じ、自分の声の響きに悦に入つたのである。こういう個人的な利点はたいてい数字などでは測りがたいもので、せいぜいそれがもたらす効果でそれと知られても、見事に使いこなした時でさえ言葉で把握するのは困難なものである。いづれにしても私が並より上等な材料でできている、あるいは卑近な言い方を借りれば同輩よりずっと繊細な木から刻み出されたということは、自分の目に隠れようもなかった。こう言つて私は自惚れの非難をまったく恐れない。誰に自惚れと謗そられようと意に介しない。むしろ自分は並の人間ですと申し立てたら、私は愚か者か偽善者になるに違いない。真実に従つて繰り返すが、私はもつとも繊細な木から刻み出された、とはつまりこの上なく繊細な人間なのである。

孤独に成長した私には（姉のオリュンピアは数歳年長だったのである）、あれこれ奇妙なことを考え出して熱中する傾向があつた。ここでその例を二つ。第一に、私は人間の意志の力という、神秘に満ちた、時に超自然的な結果をさえもたらす力を、わが身において鍛え、究明しようという、マニアックな気まぐれに取り憑かれた。御存じのとおり、瞳孔が縮小したり拡大したりする運動は、そこに当たる光の強さに依存

する。そこで私は、この我儘わがままな不随意筋の運動を屈服させて、私の意志の影響下に置こうと断固決意したのである。私は鏡の前に立ち雑念を断とうと努め、全神経を集中して、意のままに瞳孔を狭め、また開こうとした。そしてこの執拗な訓練は、断言して憚はばらないが、見事に成功したのである。最初は神経の緊張のあまり汗をかき、顔色も変わったが、瞳孔はただ不規則に揺らめくだけだった。しかしやがて私は文字通り瞳孔を支配下に置き、それを小さな点にすることも、黒く輝く大きな円にすることも自由になった。この成功がもたらした満足は、ほとんど恐ろしいばかりのもので、人間の本性の秘密を見た戦慄せんりつを伴わないではいかなかった。

もう一つの奇妙な考えは、当時しばしば私の精神を楽しませ、今でもまだその魅力と意味を失っていないのだが、それは次のような自問自答である。「世界を小さいと見るのと、大きいと見るのと、どちらが有効か」。私はこんなふうに考えた。偉大な男たち、軍司令官とか卓越した国家指導者とか、要するに力を持って衆に抜きこんでたあらゆる種類の征服者・支配者というものは、その本性上、世界をチェス盤のように小さいと思っているに違いない。そうでなければ、個々人の幸不幸などお構いなしで大胆不敵に、自分らの見晴らしのいい計画通りに事を進める無慈悲な冷酷さなど持ち

合わせていないだろうから。しかし他方で、このような世界を小さく見る目の働きは、人生において何も成し遂げないという結果をもたらす可能性がある。なぜなら世界と人間をたいしたものではないとかゼロとか見なし、早いうちから世界の無意味さに染まってしまう人間は、無関心と怠惰に沈み込み、世界に対する侮蔑をこめて、人の心へのどんな働きかけよりも完全な隠退の方がいいと思うようになるだろう。——その無感覚と、関与と努力の欠如とによって至る所で衝突し、自覚を持った世界を一足ごとに損ない、そうして思いがけずうまくいく道さえも切り捨ててしまう、そういう欠点を別にしても。それならば、と私は自分に問うた。この世で多少とも人に認められ評価を得るには、世界と人間の中に、熱意と献身の努力に値する、偉大で素晴らしい価値のあることを見た方が賢明なのだろうか。これに對しては、こう答える声がある。そんなふうに世界を大きく尊敬をこめて見ると、自分が小さく見えてどうにもならなくなる。すると世界はそういう恐れ^{かしこ}畏まった子供の上を通り過ぎて、堂々たる偉丈夫の恋人を探しに行く。しかし他面、こういう世界に對する敬虔な信仰には、それでもやはり大きな利点がある。なぜならあらゆる人と物事をその物その人として重く受け止める者は、ただ単にそれらに媚びてあれこれ援助を受けるだけではなく、何を考

え何をするのにも本気と情熱と責任を持って当たるようになり、それがその人に魅力と意義を与え、それによってこの上もなく上首尾の結果に導かれることもあるからだ。——こんなふうに私は思案を巡らし、ああかこうかと思ひ比べた。それはそれ、実際の私の態度は、なんの企みもなく自分の本性に従っていつも第二の可能性の側に立ち、この世界を大きな無限の誘惑に満ちたものとして尊重してきた。世界にはどれほど甘美な至福があるか知れず、それを求めてどんな努力もするに値すると私には思えたのだ。

第三章

こういう空想の試みや空理空論のおかげで、私は、昔ながらのやり方で遊んでいる町の同年輩の学校仲間から、心の中で自分を都合よく区別していたのだが、そこに更に、ブドウ園経営者や役人の息子であるこれら小僧どもが、彼らの両親から、あの子には気をつけなさいと警告され、私を避けるように仕向けられていたという事実が付け加わった。これは自分としてすぐに気付かないわけにはいかなかった。実際、連中の一人を試しに誘ってみたところ、その子は私に面と向かってこう素氣すげな無い言葉を投げたのだ。君と遊んじゃだめって言われてるし、君んちに行くのもだめなんだ、君の家族は怪しいからって。これはさすがにこたえた。その子と遊んだからといって何の利点もなかったが、そう言われてかえって遊びたくてたまらなくなった。しかし私の家をめぐる町の評判にそれなりの正当性があつたことは否定できない。

ブー出身のベビーシッターを雇ったことで一家の生活に持ち込まれたごたごたについては、だいぶ前のところで既に軽く触れておいた。実際、気の毒な父はこの娘に首つ丈になり、やはり狙った獲物は手に入れたのだろう。それで父と母の間に見解の相違というものが生じ、その結果、父は数週間マインツに出かけては、気晴らしを求めてたびたび独り者の生活をするようになった。ところで母の方は、これといった才能もないぱつとしない女であつたが、気の毒な父をあのように無慈悲に扱つたのは、完全に間違ひであつた。なぜなら母は、姉のオリュンピアもそうなのだが（でつぷり肥つた、肉欲の感覚以外何もないというような女であり、後日オペレッタの舞台に出て多少の喝采を博した）、人間としての弱さという点で父にまったく引けを取らなかつたからである。ただ、父の行き当たりばつたりの呑気さ^{のんき}にはいつもなにがしか優美の気配があつたが、母と姉の鈍重な快楽欲にはほとんど完全にそれが欠けていた。あんなにも狎れ^な合つた母と娘というのは滅多にあるものではない。思い起こすとたとえば、年上の方が巻き尺で若い方の太腿^{ふともも}の太さを測っているところを目撃したことがあるのだが、これにはそのあと数時間頭を抱えさせられた。また別な時には、私がそういうことをもうほんやりとわかりかけていて、ただそれを言い表す言葉をまだ知ら

なかつた時期だったが、家に來て働いていたペンキ屋の職人を、二人でしつこく付け回してふざけているところを、私は秘かに目撃した。これは白い仕事着を着た黒い目の若者だったが、二人に嵌められてとうとう頭に血が上り、一種の怒りの発作に駆られ、顔にペンキで描かれた緑の口髭をつけたまま、金切り声を上げる女二人を屋根裏の洗濯物乾燥室まで追いつめていた。

両親はお互いにうんざりして雲行きが怪しくなると、非常に頻繁に、マインツやヴィースバーデンから客を招いた。その度に我が家は大盤振る舞いの無礼講になった。それは雑多な集まりだった。数名の若い工場経営者、男女の舞台俳優、ひ弱そうな歩兵隊少尉が一人、この人は後に姉と結婚させてくれと言いだした。ユダヤ人の銀行家と彼の奥さん、この夫人は黒玉を散らしたワンピースのどこもかしこもはち切れんばかりで、実に印象が深かった。額に巻き毛を垂らしてビロードのチョッキを着たジャーナリストが一人、この人は来る度に新しい伴侶を紹介した、などなど。たいてい七時のディナーに顔を揃え、それから宴会になって、ピアノ演奏、ダンスのステツプ、笑い声、叫び声、大騒ぎの連続で、一晚中続くのが常だった。とくにカーニバルとブドウの収穫の季節は、享樂の波が高まった。そんなとき父は自分の手で見事な花

火を打ち上げた。知識豊富な熟練の技だった。魔術的な光の中に固焼き陶土の小人が姿を現し、集まった人たちは滑稽な仮面をつけ、無礼講の気分を盛り上げた。当時私は町の実科高等学校に通わされていたのだが、朝七時か七時半に、さっぱりと顔を洗い、朝食を摂りに食堂に入ると、パーティーの一同がくたくたになって意気消沈し、昼の光に耐えられない目で、コーヒーとリキュールを前にしてまだそこにいたのである。私は盛大なハローの呼び声を浴びせられ彼らの真ん中に迎えられた。

未成年の私も宴会の席に着き、姉のオリュンピア同様その後の気晴らしにも同席することを許された。我が家の食事は毎日豪勢で、父は昼食に必ずソーダ水割りのシャパンを飲んでいた。しかし来客となると料理のリストが延々と続き、ヴィースバーデンから呼ばれたシェフが我が家の料理女を助手に洗練の極致の腕を振るい、胃袋を活気づけ食欲を蘇らせるように、冷たい一品やピリリと辛い一品を取り混ぜて、メニユーの順を工夫した。「ローレライ・エクストラ・キュヴェ」が惜し気もなく注がれたのは勿論、たくさんの上等のワインが並べられた。例えば「ベルンカストラ・ドクトール」、この酒のピリツとした味わいは絶品であった。後日、私は他にも優れた銘柄を知り、眉一つ動かさずに注文することを覚えた。例えば「グラン・ヴァン・

シャトー・マルゴー」と「グラン・クリュ・シャトー・ムートン・ロートシルト」——実にエレガントな酒である。

父の姿を思い起こすと今も喜びを覚える。先の尖った白い顎鬚を付け、白いシルクのチョッキで腹を包み、テーブルに着いていたその姿。父の声は弱く、ときどき恥ずかしそうに目を伏せたが、つやつやと赤みをおびたその顔から父の満足が読み取れた。「^{セ・サ}そのとおり」、「^{エバタン}おみごと」、「^{バルフェトマン}かんぺき」という言葉がこぼれた。父は指先を上にならせた両手をさも洗練された風^{ふう}に動かして、グラスやナプキンや食器を扱った。母と姉は白痴も同然にたらふく飲み食いし、その合間には扇子で顔を隠して両隣の人とくすくす笑い合っていた。

食事が終わり、ガス灯のシャンデリアがタバコの煙に包まれる頃になると、ダンスと罰金ゲームが始まった。夜が更けると私はベッドに追いやられたが、音楽と騒音で眠れなかったので、たいていはまた起き出して、赤い毛布を体にまとい、夜会の中に戻った。すると毛布に包まれたその格好がよく似合うというので婦人たちの喝采を浴びた。パンチャレモネード、塩漬けニシンのサラダにワインのゼリー、そういう元気をつける飲み物や軽食は、朝のコーヒーまで途切れることがなかった。一同は底抜け

に明るく踊り狂い、罰金ゲームを口実にして接吻を交わし、体の他の部分にも触れ合った。襟えりぐ袢りの広い服を着た婦人たちは、椅子の背もたれ越しに笑いながら身を屈め、胸の奥を覗かせて男たちの歓心を買った。突然ガス灯を消すという悪戯いたずらがたびたび行われて、一夜のクライマックスとなった。その度に上を下への大混乱になったが、それはもうここに書けない。

私たち一家が町で胡散臭いと思われたのは、何よりもこのパーティーのせいである。これは私の耳にも入ったことだが、そのさい人々が見ていたのは、主として事の経済的側面である。すなわち、気の毒な父の商売がどうしようもないくらい傾いて、経営者が花火だのディナーだのにあんなに金を注ぎ込んではいよいよ自分の首を絞めることになる、取り沙汰されたのだった（そしてそれは正しかった）。この世間の不信は、子供なりに敏感な私の心にも察知されて、それが、既に述べたことだが、一風変わった私の性格と結ばれて孤立を招くことになり、この孤立はしばしば私の苦しみの元凶となった。それだけに当時のある一つの体験は私を心から幸せにした。ここでそのことを、特別な満足をこめて書き記しておきたいと思う。

八歳の時であった。私は家族と共に夏の数週間を、近隣の有名なランゲンシュヴァ

ルバッハで過ごした。父はときどき襲ってくる痛風発作に対し、その地で泥炭浴を試み、母と姉は奇抜な形の帽子で遊歩道を練り歩き、評判になつていた。どこでもそうだったが、その地で私たち一家が得た社交場の付き合いに、ほとんど名誉といえるものはなかった。近隣に住んでいる人たちは普段通り私たちを避けたし、遠くから来た上品な人たちは、もともと上品とはそういうもののだが、狎狎なれなれしいところがなく、拒否的であつた。そして私たちと結び付いて一緒になつた人たちには、繊細さのかけらもなかった。それでも私はランゲンシュヴァルバッハにいて気持がよかつた。なぜなら私は温泉地に滞在することが大好きで、後には自分の影響力の及ぶ舞台を繰り返しそのような場所に移したほどなのだから。町の落ち着き、のんびりと整つた日々の進み行き、生まれも育ちもいい人たちがスポーツ施設や療治場の庭園で過ごす光景、そういうものは私の心の奥底の望みに適っている。しかしその他に何よりも私を魅了したのは、訓練を積んだオーケストラによって毎日湯治場の客に提供されたコンサートだった。音楽は私を夢中にする。自分で音楽をたしなむ訓練を受ける機会は持たなかつたが、私はこの夢想的な芸術の熱狂的なファンだ。もう子供の頃から、似合いの制服を着た楽団が、ジプシーのような外見の背の低い楽長の指揮の下、オペラの小品

などをメドレーで鳴らすしやれたパビリオンのそばを離れることができなかった。私
は何時間でも綺麗な芸術の殿堂の階段にしゃがみこんで、様々な音の織りなす典雅な
輪舞に胸を躍らせ、同時に、練達の音楽家たちがそれぞれの楽器を操る動作を熱心に
目で追った。中でも私を夢中にさせたのはヴァイオリンの演奏だった。そしてホテル
に帰ると、短いのと長いのと二本の棒を使って第一ヴァイオリン奏者の動きを忠実に
真似ようとして楽しみ、また家族のものを楽しました。心のこもった音を響かせるた
めの左手のスウィング、ポジションからポジションへの滑るようになめらかな移動、
名人芸的なパッセージとカデンツでの指の敏捷さ、右手関節のスマートでしなやかな
運弓、楽器に押し当てられた頬に浮かぶ、耳を澄ませて響きを作り出す忘我の表
情——こうしたすべてのことを、私は完璧に再現してみせた。これには誰よりも父が、
熱烈な喝采をせずにいられなくなった。そこでこの父は、湯治の霊験もあらたかな上
機嫌で、髪の毛の長いほとんど声も出ない楽長君を脇に呼び、楽長君と次のようなコメ
ディーを画策する。小型のヴァイオリンが安く入手され、付属の弓に慎重にワセリン
が塗られる。普段は私の外見などほとんど構われたことがなかったのに、とあるバ
ザーで、モールと金ボタンのついた可愛い水夫の制服が、シルクの靴下とびかびかの

エナメル靴と一緒に調達される。そしてある日曜日、湯治客の散策の時間に、私は人目を引く服装で、音楽の殿堂の舞台前面に背の低い楽長と並んで立ち、ハンガリーのダンス音楽の演奏に参加する。ヴァイオリンとワセリンを塗った弓を動かして、この前二本の棒でやったことをやってみせる。成功は完璧だったと言ってよからう。

聴衆は貴賤を問わずバビリオンの前に釘付けになり、更に四方八方から押し寄せた。目の前に神童がいた。音楽への献身、青ざめて活発に動く表情、片方の目の上に垂れた波打つ髪、膨らめた上腕部から下に行くほど細くなつていく袖にぴつたりと関節を包まれた子供の手——要するに、私の素晴らしい感動的な姿が人々の心を魅了したのである。全ての弦の上にたつぷりとエネルギーギッシュに弓を滑らせ弾き終えたと、喝采の嵐が湯治場の施設を満たした。背の低い楽長が私のヴァイオリンと弓を安全に確保してから、私は平土間に降ろされた。賛辞と愛称と愛撫が雨霰あられと降り注ぐ。貴族の婦人や紳士方が私の周りに押し寄せ、私の髪や頬や手を撫で、悪魔の子だの天使の子だのと言う。全身をスミレ色のシルクに包み、耳の上に白い巻き毛を盛大に垂らしたロシアの老侯爵夫人が、指輪だらけの両手に私の頭を挟み、汗に濡れた額に接吻する。それから堅ツル琴の形の輝く大きなダイヤモンドのブローチを、是非ともという勢いでも

どかしげに襟元から外し、止めどなくフランス語で話しかけながら、私のシャツに留める。私の家族が歩み寄って、父が自己紹介をし、まだ幼いので拙い演奏^{つたな}でして、と詫びを言った。私は菓子屋に連れて行かれた。三つのテーブルを順繰りに移動して、チヨコレートやミルフィーユを振る舞われた。以前何度も羨望の視線でその様子を窺^{うかが}った幼いジーベンクリンゲン伯爵たち、これまでは冷たい視線しか返してくれなかったその美しく豊かな貴族の子供たちから、クロツケーを一試合付き合ってほしいと丁寧^{ていねい}に申し込まれた。そして私と彼らの親たちが一緒にコーヒーを飲んでいる間、私は輝くダイヤのピンを胸に光らせ、喜びに熱く酔いしれて彼らの招待に従ったのである。それは私の人生の最も美しい日の一つだった。おそらく文句なしに最も美しい日だった。もう一度演奏してほしいというたくさんの声が聞かれ、湯治場の管理事務所もその意向を父の所に伝えにきた。しかし父はこう答えた、あれは例外的に許可しただけです、繰り返し公衆の面前に立つのは、あの子の社会的な立場が許しません。私たちのランゲンシュヴァルバッハでの滞在も終わりに近付いていた……。

第四章

ここで私の代父シメルプレースターのことを話そう。決してどこにでもいるような男ではなかった。その風采であるが、背恰好はずんぐりむっくり、髪の毛は若いうちから灰色になり、てらてら光って、片方の耳のすぐ上で二つに分けられ、長い方がほとんど頭頂部全体を覆うように反対側に撫でつけられている。髭を蓄えない顔には鉤鼻、ぎゅつと結んだ唇、セルロイドの縁を付けたまん丸の大きな眼鏡。さらにその顔は、両目の上がつるつる、つまり眉がないことによつて際立っていた。全体として鋭く辛辣な精神の持ち主だと思わせる顔だった。たとえば代父はよく、自分の名前を奇妙に心気症的に解釈してみせたものである。「自然は腐敗とカビ^{シメル}以外の何物でもない。私はその^{ヒポコンデリック}司祭^{プリースター}を拝命したので、シメルプレースターというのだ。しかしこの私がなぜ^幸フェーリクス^福という名前なのか、それは神のみぞ知るだね」。代父はケルンの出身

だった。その地で以前は第一級の家々と交わり、カーニバルの幹事として重要な役割を演じたが、何かの事情で、あるいは何かの出来事があつて——その事情も出来事も、これまで一度も説明されたことはない——、その地を撤退せざるをえなくなり、私たちの住む小さな町に引つ込み、それから間もなく、私が生まれる数年前にはもう一家の友人になつていた。我が家のパーティーには決まつて顔を出す、欠くべからざる人物で、訪れる客の誰からも尊敬されていた。この男が口をへの字に結び、人が何かを値踏みする時の、注意力と無関心をない交ぜた視線で、梟の目のような眼鏡越しに女たちを見つめると、見られた方はキャーキャーと騒いで、両腕を前に突き出し身を守ろうという仕草をした。「まあ、画家さんたら！」女たちは叫んだ。「あの目つき！心の奥まで丸ごとお見通しなんだわ。勘弁して、プロフェッサー。その目を外してくださいな！」しかし彼は人からどんなに称賛されても、自分の職業をそんなに高く買つておらず、芸術家の本性についてしばしば疑わしいコメントを口にした。その一例。「フイーディアスは、フエイディアスとも呼ばれますが、並外れた才能を持った男でした。その証拠に、泥棒の罪が確定してアテネの牢屋に入れられたという事実がありますね。というのは、パラス・アテネの彫像を作るために、その材料として任さ

れた黄金と象牙を着服したんです。フィーディアスを見出したペリクレスは彼を牢獄から逃亡させた（この行動によってペリクレスは、たんに芸術というものをわかつていただけではなく、この方がずっと重要ですが、芸術家というものがどういうものかわかっているところを示したわけです）。フィーディアス、というかフェイディアスはオリンピックに逃げた。その地で彼は偉大なゼウスを黄金と象牙で作るといふ仕事を受けた。で、どうしたか？ また盗んだんです。そしてオリンピックの牢獄で死にました。盗癖と才能が混じり合っているのだから人目を引きますね。しかし世間の見る目はこんなものです。人々は才能を求めるんでしょうが、才能はそれ自体が奇矯なのです。奇矯さはふつう才能と結ばれていて——おそらく必然的に結ばれているのですが、世間の方は奇矯な人間に用はない。彼らを理解しようなんて気はまったくありません」。私の代父はこんな具合であった。彼は同じ言い方をしばしば繰り返したので、私は文字通りそれを覚えてしまった。

前にも記したことだが、私と代父は心から打ち解けた関係にあった。特別に可愛がられたと言って差し支えないと思う。思春期になってからは何度も彼の絵のモデルを務めた。これは代父が山のように集めて持っていた様々な変装用の衣装を着せてくれ

たので、それだけいっそう楽しいものになった。彼の仕事場は、大きな窓の付いた一種のガラタ倉庫で、下のライン川に面してそこだけ孤立した小さな家の屋根裏にあった。代父はそこを借りて年取った家政婦と一緒に住んでいた。私はその部屋の雑に組み立てられた台の上で何時間も代父のために、彼の言う「モデルを務め」、代父はキャンバスに向かい、絵の具を塗ったり削ったりして、創作に励んだ。ギリシアの伝説に題材を取った大きな絵画のために、何度か裸でモデルに立ったことも言っておこう。この絵はマインツのあるワイン商の食堂を飾ることになっていた。その折に私は芸術家からたつぷりと賛辞を浴びせられた。それは私が並外れて美しく、神ともふう姿だったからである。ほっそりとして、手足はしなやかで力強く、皮膚は金色、非難の余地なく見事に均整がとれていた。——このポーリングは思い出としてはやはり風変わりである。いま思うに、もっと楽しかったのは、なんと言っても仮装を許された時だった。これは代父の仕事場で行われただけではない。彼は私の家の夕食に与ろうと思った時には、先に梱こづりいっぱいの衣装と髪かつらと武具を送ってよこし、食事が済むとただ楽しみのために私に様々な衣装を試着させ、最も気に入った姿を画用紙に描きとるのである。「この子には扮装の才能がある」というのが、彼の言い草だった。

それは、私に似合わないものはない、どんな仮装もごく自然にぴったりはまってしまうという意味だった。なぜなら私の仮装は、短衣を着て、黒い縮れ毛にバラの冠を飾ったローマの横笛を吹く男であれ、ぴっちりした襦しゅす子に身を包み、レースの襟と羽根飾りつきの帽子を着けたイギリスの貴族生まれの小姓であれ、きらきら光る小さなジャケットを着て、鍔つば広のフェルト帽を被かぶったスペインの闘牛士であれ、縁のない小さなキャップに胸元で交差する襟飾り、小さなマントに尾錠靴という姿の、髪粉が使われた時代の若い聖職者であれ、肩章付きの白い軍服に剣を佩はいたオーストリアの将校であれ、膝下文の靴下と底に鋏を打った靴を履き、緑の帽子にカモシカの毛を飾ったドイツの山岳地方の農夫であれ、――要するにどういう服装をさせられても、そこそ私にうってつけ、まさにその格好のために生まれついたかのように見えたとし、鏡もそれを保証してくれたのである。何を着ても、皆が異口同音に言ったことだが、私はそのとき自分が代表している種類の人たちの模範的な実例だった。そうなのだ、私の代父の指摘によれば、私の顔は衣装と鬘の助けを借りると、様々な階層や地域に適合するばかりか、様々な時代にも適合するように見えただ。どんな時代もその時代の子に共通の人相上の特徴を刻むものだと、代父は私たちに教えてくれた。――とこ

ろが私の顔は、我が家の友人の言を信じるならば、中世が終わる時代のフィレンツェの洒落者になっても、それより後の時代が上品な貴顕紳士に与えたこれ見よがしの巻き毛を飾りに付けても、まさにその時代の絵から抜け出てきたように見えたのであった。——ああ、それは実にすばらしい時間だった！ しかしその気晴らしも終わって、普段のつまらない味気ない服に戻ると、私はどうしようもない悲しみと憧れに襲われた。筆舌に尽くし難い果てしない退屈の思いに圧倒され、その夜の残りを、深く言葉もない敗北の、荒涼たる気分の中に過ごしたのである。

シメルプレースターについては今はここまで。のちに、心身をすり減らす私の人生の最後に、この傑出した人物は、決定的な形で私の運命に関わり、救いの手を差し伸べる筈である……。

第五章

さて、私の青少年期の印象をさらに探ってみると、家族に同行して初めてヴィースバーデンの劇場に行くことを許された日のことを思い出さないわけにはいかない。ここでついでに断っておかねばならないが、私は青春の日々を語るのに、年の順を慎重に追っているわけではない。むしろ人生のこの一時期をひとまとまりのものとして扱い、その中を好き勝手に動いている。代父シメルプリースターのためにギリシアの神のモデルを務めたのは、十六歳から十八歳の頃であって、学校では非常に遅れていたものの、ほとんどもう青年であった。しかし私が初めて劇場に行ったのはもっと早く、十三歳の時であった、——何はともあれ、体と精神の発達が（すぐにまたもつと詳しく語るつもりであるが）、もうだいたいぶ進み、様々な印象に対する感受性も活発と言っている時期であった。じっさいその夜見聞いたことは、心に深く刻み込まれ、その後

もあれこれと考えを廻らす材料を提供してくれた。

私たちは最初にウィーン風の喫茶店に入り、甘いパンチを飲んだ。父はストローでアブサンを啜^{すす}っていたが、そういうことの全てが私の心を深く揺り動かした。しかし、辻馬車によって好奇心の目指す場所に運ばれ、棧^{さじき}敷席を備えた輝くホールに迎え入れられたとき、私の全身を圧倒した興奮を、誰が書き表すことができるだろうか。バルコニー席に陣取って胸を扇子で煽^ふいでいる婦人たち。その婦人たちの方に話しかけながら身を屈める紳士たち。私たちが座った平土間席の観客の低いざわめき。髪や衣装から立ち上る匂^{のほ}いに照明用のガスの臭いが混じった空気。音合わせするオーケストラの低く混乱した音。前景から背景へバラ色の遠近法で裸体の天才たちをたくさん描き込んだ、ホールの天井とカーテンの豪華な装飾画。こういうものが何もかも、どれほど若い五感を開き、精神に類^{たぐ}まれな受胎の準備をさせたことだろう。このように大きく豪華なホールにたくさんの人が集まる様は、これまで教会の中でしか見たことがなかった。じつさい私には劇場というこの莊重に分割された空間は、その中の一段と高い光り輝く舞台で、派手な服を着て音楽に包まれた芸達者たちが、定められた通りの歩みを進め、ダンスを踊り、会話を交わし、歌を歌い、そうして筋書きを満たして

いくのだが、——いや、言い直そう、じっさい私には、劇場は娯楽の聖堂に思えた。そこは、敬虔な感動に飢えた人々が、暗闇の中で明るく完成された世界に対座し、口をぽかんと開けて心の理想を見上げる場所だった。

演じられたのは気楽なジャンルの作品だった。薄布を一枚纏まとっただけのミューズの作品と、そんなふうに見えるかも知れない。つまりオペレッタだったが、残念なことにタイトルは忘れてしまった。舞台はパリ（これは気の毒な父の気分をおおいに高めた）、要かなめとなるのは若いのらくら者というか、公使館付きの専門補佐官、人の心をつかんで離さない女たらしの食わせ者で、この役を劇場のスター、ミューラー・ロゼという名前の人気絶大の歌手が務めていた。この役者の名前は父から聞いていた。父はこの男と知り合いになったことを喜んでいたが、この人物の姿は永遠に私の記憶の中に生き続けるだろう。今ではもう、この私と同じように年老いて、役立たずとなっているかも知れないが、当時ロゼが私も含めて多数の観客の心をどれほど惹き付け籠絡ろうらくする術すべを心得ていたか、それは私の人生の決定的な印象の一つである。「籠絡する」と言ったが、その言葉にどれだけの意味が含まれているか、いま少し先で説明するつもりである。さしあたりここではミューラー・ロゼの舞台姿を今も鮮やかな記憶を辿って

描き出してみよう。

最初登場した時は黒服であったが、それでも虚飾の輝きを放っていた。筋書きによれば、上流人士の集うどこか享楽の場所からの帰り道で少し酔っている、とまあこういうところを、嫌味にならない範囲で、いかにも優美かつ高尚にその場に再現してみせたのである。ロゼは、縐子の裏地を付けた黒い袖なしのコートを着用し、燕尾服用の黒ズボンにエナメルうなじの靴、光沢のある白いキッド革の手袋、艶やかに整えた髪には当時流行の軍隊式に項うなじの近くまで分け目を入れ、その頭にシルクハットを載せていた。なにもかもアイロンで一氣にびしっと固めたように完璧だった。実際の生活では十五分も維持できないようなおろしたてのまつさら、言ってみればこの世のものとは思えなかった。中でも特に磊落らいらくを氣取つて額に斜めに被せたシルクハットが、じつさいシルクハットとはこういうものだという模範的な理想の姿をしていた。塵一つ皺一つなく、この世ならぬ輝きに包まれて、まるで絵から抜け出してきたよう、——その様子に上流めかした人物の顔がよく映えた。最上質の蠟で作ったようなその顔は柔らかなバラ色を帯び、アーモンド形の目は黒く縁取られ、短く真つ直ぐな鼻はやや小振り、サンゴ色の口はきつぱりと際立つて、弓形の曲線を示す上唇の上には、定規で

測つたようにバランスのとれた小さい口髭が刷毛^{はけ}で引いたような弧を描いていた。敏捷な千鳥足と言つても、現実の酔っぱらいには見られないものだが、ロゼはまさにそんな動きで召使に帽子とステッキを渡し、するりとコートを脱ぐと、たつぷり襷飾^{ひだり}りを付けたシャツの胸元に輝くダイヤのボタンを留めた、燕尾服の姿が現れた。明るく澄んだ銀色の声で喋り笑い、手袋も取ると、その手の外側は小麦粉のように白く、そこにもダイヤが飾られ、手の平の方は顔と同じバラ色であるのがわかった。ロゼは舞台前縁の片方の端で持ち歌の第一節をメロディーだけ陽気にラララで歌い、公使館付きの補佐官で漁色家である人生の並外れた気楽さ楽しさを描いてみせた。それから満足げに両腕を開いて指をパチンと鳴らし、踊りながら前縁の反対側に進み、第二節を歌っていったん引つ込んだが、それは拍手に呼び戻されて、プロンプターボックスの前で第三節を歌うためだった。そのあと能天気には優雅な身振りを見せて話の筋に戻った。彼は大金持ちという設定で、そのためその姿から後光がさしていた。筋の展開に合わせて様々な衣装で登場した。雪のように白い上下のスポートウエアに赤いベルト、手の込んだ幻想的な制服、それどころか抱腹絶倒のややこしい恋のもつれの場面では真っ青なシルクのズボン下姿で現れた。彼が演じて見せたのは、大胆で上機嫌で、ア

バンチュールの魅惑をいっばいに湛^{たた}えた場面だった。公爵夫人の足元にひれ伏す。厚かましい二人の娼婦とシャンパンの零^{こぼ}れる晚餐の席を共にする。ピストルを構えて、腹の底から悪そうな恋敵と決闘寸前。こういう粹^{いき}な窮地のどれも、非の打ち所のない彼の姿をほんの僅かでも損なうことはなかった。アイロンの折り目が崩れたり、光輝が消えたり、バラ色の顔が不快な熱を帯びたりすることはなかった。音楽の指示と芝居の規則によって縛られてはいるが同時に気分を高揚させ、束縛^{みじん}の中でかえって自由大胆かつ軽快に、ロゼの身ごなしは日常の投げやりな気配など微塵^{みじん}も留めぬ優雅さを帯びた。その体は指先まで、ある魔力によって貫かれていたようだった。それを言い表すには「才能」という曖昧な言葉しかないが、明らかにそれこそ私たち観客全員に對してだけでなく、ロゼ本人にも同じ喜びを与えているものだった。彼がステッキの銀の握りを握^{つか}み、あるいは両手をズボンのポケットに滑り込ませたりする様を見てみると、心の底からうっとりとした。安楽椅子から身を起こしたり、お辞儀をしたり、登場と退場を繰り返したりする姿は、自己満足に溢れ、それが心を生きる喜びで満ちた。そう、まさにこれなのだ。ミュラー・ロゼは生きる喜びをまき散らした。――人は美しく幸せで完璧なものを見ると、羨望と憧れと希望と愛の衝動に心を燃え立た

せるものであるが、「愛の喜び」というこの言葉がそういう貴重な痛みを伴う感情を表すものならば、ロゼのまき散らしたものは、まさにそれだったのである。

私たちの周囲の平土間の観客は、一般の市民とその夫人たち、店員、一年志願兵、それに可愛い女の子たちであった。そして私は言葉に表せないくらい楽しんではいても、周りを見回して、舞台の出し物がこの娯楽の仲間たちに及ぼした効果を探り、自分自身の感情を手がかりに周囲の人たちの表情を読むという、そのくらいの冷めた意識と好奇心は持っていたのである。人々の顔に表れていたのは快樂に呆けた表情であつた。愚かしい忘我の微笑が一樣に観客の唇に浮かんでいた。小娘たちの微笑が甘つた面白い興奮したもので、婦人たちの微笑が陶然と蕩とろけていく没頭を表していたのに対して、男たちの微笑は、つましい暮らしの父親が輝かしい息子を見る時の、恭うやうやしく感動した愛情を示していた。息子たちの生活は自分たちのはるか上に行つてしまひ、父親たちはそこに自身の青春の夢の実現を見るのである。店員たちと一年志願兵はどうかと言うと、舞台を見上げる彼らの顔の何もかもが、目も鼻の穴も口もただただ大きく開かれていた。その顔で彼らは笑っていた。おれたちが今のこのズボン下のままであの上になつたら、と彼らは考えたのかも知れない、——そりゃあ、たまんね

えだろうなあ。あいつはあんなはすつばなあばずれを二人も腕にかかえて、まるでへえつちやらじゃねえか！——ミユラー・ロゼが舞台を下がると、人々の肩は落ち、観客席から力が引いていくようだった。彼が腕を高くあげ高音を保ちながら、嵐のような勝利の足取りで背景から前面に躍り出ると、観客の胸が彼を迎えて膨らみ、婦人たちの繻子のコルセットの縫い目がきしんだ。そう、この暗がりに犇めく人々は、陶酔に言葉も視力も失い、輝く炎に身を躍らせる夜の虫の大群に似ていた。

私の父は王侯のように楽しんでた。フランス風の習慣で帽子とステッキをホールの中でも離さなかった。幕が下りるとすぐに帽子を頭に載せ、ステッキで音高く何度も床をついて熱烈な喝采を表した。「これはおみごとセ・テ・バ・グン！」小さな声でうつとりと何度もそう言った。しかし芝居がはね、もう何もかも終わって外の通路に出ると、私たちの周囲では、心を奪われ心を高められた店員たちがその様子も露あらわに喋り散らし、自分たちの赤くなった手を眺め、ステッキを擱おんで一夜のヒーローを真似ようとしていたのだが、そんな中で父が私にこう言ったのだ。「一緒においで。あの人と握手してこよう。知らない仲じゃないんだからね、ミユラーと私は！ この顔を見たら大喜びだろうさ！」そして女たちには玄関ホールで待っているように言って、ほんとうに

ミユラー・ロゼに挨拶に出かけた。

最初に通り返けたのが、舞台のすぐ横の既に明かりの消えた劇場支配人の小部屋、そこから狭い鉄製の扉をくぐって書割かきわりの後ろに回り込んだ。舞台の薄闇の中で大道具を片付ける人たちが幽霊のように立ち働いていた。芝居の中でエレベーターボーイを演じていた赤いお仕着せの端役の人が、壁に肩をもたせてなにかもの思いに耽っていたのを、気の毒な父が冗談にその人の体の一番がつしりしたところをつねって、お目当ての化粧室を尋ねると、不機嫌そうにあちちだと教えてくれた。漆喰塗りの通路を進むと、その閉ざされた空気の中で裸のガス灯の炎が燃えていた。廊下に通じるいくつかの扉越しに、罵り声、笑い声、喋り声が漏れてきた。父は陽気に笑いながら親指を立てて、人生はこんなものだということを教えてくれた。さらに進んで通路の一番端の狭い壁に付けられた最後の扉に辿りつくと、父はノックする指の関節に耳を近寄せて、その扉を叩いた。中から「どなた？」と問う声が出た。もしかしたら「へん、くそったれ！」だったかも知れない。明るいのには無愛想だったその声を、正確には覚えていない。「入ってもよろしいか？」と父が尋ねると、それよりもっと他の、ここには書けないようなことをするがよからうという返事だった。父は声を立てずきまり

悪そうに笑って答えた。「ミユラー、私だ、——クルルだ、エンゲルベルト・クルルだよ。ぜひともあなたにご挨拶したいと思ってね！」中で笑い声がして「おお、君か、老いぼれの道楽者か！ さあ、ずずつと入って楽らくにしてくれ！——大丈夫と思うが」、その声が続いている間に、父と私は戸口に立った。「私の裸で具合が悪くならないだろうな」。中に入ると、忘れようもないおぞましい光景が子供の目に飛び込んできた。

ドーランのこびり付いた埃っぽい鏡に向かい、ミユラー・ロゼは汚れたテーブルの前に座っていた。グレーのトリコットのズボン下以外なにも身につけていなかった。シャツ姿の男が一人、汗まみれのこの歌手の背中をタオルで拭ふいていたが、そうされながら本人も、ドーランをてらてらと厚く塗りつけた顔と首を、色付けの油脂分で固くこわばったもう一枚の布で拭ぬぐおうと奮闘中であつた。顔の半分は、さつきその顔をつやつやと理想的に輝かせていたバラ色の層に覆われていたが、それは今、既に色を落とした片側のチーズのようにくすんだ色に對して、赤と黄色の混濁した滑稽な對照をなしていた。公使館付き補佐官の役で被っていたしっかり分け目をつけたきれいな栗色の髪はすでに外されていて、見れば本人の髪は赤毛だった。目の片方はまだ黒く

縁取られていて、メタリックに黒く光る粉が睫毛に付いていたが、もう片方の、こすって赤くなった目が、化粧を落とされ涙目になって、無遠慮に訪問客の方にまばたきした。しかしそうしたことはすべて、ミユラー・ロゼの胸と肩と背中と上腕が吹き出物に覆われていなかったら、まだ我慢の範囲内だったかも知れない。反吐の出るような吹き出物だった。赤く縁取られて、先端が膿み、出血している箇所もある。今でもあれを思い出すとぞっとする。私たち人間の嘔吐の機能は、欲望が活発であればあるだけ大きくなる。つまりこの世とこの世が提供するものに執着すればするほど大きくなる。私としてはそうコメントしておきたい。天性冷淡で何事にも愛着がなければ、あのとき私がそうだったような吐き気に襲われたりはしないものだ。と言うのも、鉄製のストーブの暖房が効き過ぎたその部屋には、ある空気が充満していて、——つまり、テーブルいっぱいに並べられた高低様々な丸鉢や油脂分をたっぷり含んだ彩色スティックの放つ臭いと汗の臭いとが混じり合っていて、最初そこに入った時には、一分もこれを吸っていたらきつと具合が悪くなると思った程だったのである。

それにも拘わらず私はその場に立ち尽くして眺めた。——さて、ミユラー・ロゼの楽屋を訪ねたことについて事実としてお伝えすべきことは他にない。実際、もし私

がこの回想録を書き下ろすのは何よりも自分の楽しみのため、一般読者の楽しみは二の次というのでなかったら、自分の初めての芝居見物をこんなに詳しく扱ったのはまったくの無駄骨折りだと、自分で自分を非難しなければならないだろう。緊張感があつてバランスも良くて、なんてことは私の眼中にない。そういう配慮は、ファンタジーから靈感を得て虚構の材料から美しく規則正しい芸術作品を作り上げようとする作家たちに任せておこう。私が持ちだすのは私自身の自前の人生、この素材を自分でもいいと思うように料理するのだ。私自身と人の世について特別な教訓と説明を得たと思える経験と出来事なら、いくらでも留まつて鋭い筆致で隅々まで描きつくそう。その他の重要度に欠けることはさつと通り過ぎる。

あのときミューラー・ロゼと気の毒な父との間で交わされたお喋りは、ほとんどもう私の記憶から消えてしまった。それはたぶん、注意して聞いているゆとりが私にはなかったからだろう。なぜかと言うと、五感を通して私たちの精神に伝えられる動揺の方が、言葉が精神の中に生みだす動揺よりもずっと強烈だからだろう。いま思い出すのは、熱狂した観客の拍手喝采があの歌手に勝利を保証したのは間違いないにも拘わらず、彼が飽きもせず、自分はいけなかったか、どのくらいいけなかったかと聞き続けたことであ

る。——そして私には彼の不安が本当によくわかったのである！ それからさらに、彼が会話に織り込んだ趣味の悪いジョークがいくつか浮かんでくる。たとえば父の冷やかしに対する答えは、「減らず口をたたくなよ！」これにはすぐにこう続く。「それとも両手をつっ込んでもらいたいのか？」しかし私は彼のこういう精神の表れを、さつきも言ったように、半分も聞いていなかった。五感の受け取る体験を心の中に収めるのに大童^{おおわらわ}で、深い緊張を強いられていたのである。

すなわちこれが——そんなふうにあのころ私の考えは進んだのだが——、この脂粉まみれの、できものだらけの野郎が、あのハート泥棒なのだ。さつきまで暗闇でみんなが愛^{いと}しうに見上げていた男！ この汚らしい虫けらがあの幸せの蝶の本当の姿なのだ。ついさつきたくさんの騙^{だま}された目が、美と軽快と完璧の秘かな夢の実現をそこに見たと思った男！ この男は、暮れ方になるとメルヘンチックに光り出す、あの気持の悪いぶよぶよした虫の仲間みたいなものではないだろうか。しかしもういい大人で、普通程度には人生を知っている人たちが、唯々^{いいたく}諾々と、言うか、がつがつと騙されて、自分たちが騙されていることをまるで知らなかったのか。それとも口には出さず互いに了解あって、この欺瞞を欺瞞と思わないことにしたのか。それはあり

そんなことである。なぜならよく考えてみれば、ホタルは詩的な輝きとして夏の夜闇を漂う時と、みすばらしい不名誉な生き物として私たちの手の平の上で身をくねらせる時と、——どっちが本当の姿なのだろうか。どっちだと決めつけない方がいい！

それよりもさつき目にした光景を思い起こせ！ 言葉もなく呆けて誘惑の炎に身を躍らせた、あわれな蛾と蚊の大量！ 誘惑されたい一心で、気持が一つになっていたではないか！ 明らかにここには、神ご自身の手で人の本性に植え込まれた万人共通の欲求が働いている。ミユラー・ロゼの能力はそれを迎えるようにできているのだ。劇場には疑いもなく、人生の切り盛り^もになくしてはならない設備がある。この男はそれ僕^{しもべ}として雇われ支払われているのだ。この男が今日やり遂げたこと、間違はなく毎日やり遂げることに對しては、どんなに多くの称賛が贈られてもいい！ ロゼがおぞましい吹き出物を秘かに意識し感じながら、魅惑的な自惚れをたっぷり振りまいて顧客の前を動き回って見せたということを、吐き気をこらえて、余すところなく感じ取ってみるといい。そう、ロゼは、もちろん照明と脂粉と音楽と距離に助けられてではあったが、この顧客に彼らの心の理想をロゼという男の姿で見せてやり、それによって彼らの心を限りなく高め活気づけてやったのだ！

それだけではない！ 何がこの悪趣味ないたずら者をして、闇の中で自分を輝かせることに習熟せしめたか、考えてみるがいい。さつき彼の体を指先まで貫き支配した自己愛という魔力の秘かな源泉は何か！ そう問うて問うた自分に答えるには、ただ思い出しさえすればいい（なぜならきつと知っていることだから！）、ホタルに輝くことを教えるのは、どんな言葉の甘さをもつてしてもその甘さを充分に伝えきれない、名づけようもない力だということを。この男が、おまえはうけた、ほんとに異常なくらいうけたという保証の言葉を、聞いて聞いて聞き飽きることがなかったということを考えてみよ！ もっぱらあの餓えた観客の氣に入りたいという彼の心の衝迫が、彼をしてその芸に習熟せしめたのである。彼が観客に生きる喜びを贈り与え、観客が彼を喝采で埋めるとすれば、それはお互いのエクスタシーの交換、ロゼの欲望と観客の欲望の、新床の交わりではないだろうか？



詐欺師^{さぎし}フェーリクス・クルルの告白^{こくはく} (上)

著者 マン
訳者^{きし よしはる} 岸 美光

2011年 8 月20日 初版第 1 刷発行

発行者 駒井 稔
印刷 萩原印刷
製本 ナショナル製本

発行所 株式会社光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話 03 (5395) 8162 (編集部)
03 (5395) 8113 (書籍販売部)
03 (5395) 8125 (業務部)
www.kobunsha.com

©Yoshiharu Kishi 2011
落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取り替えいたします。
ISBN978-4-334-75233-0 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

本書の電子化は私的使用に限り、著作権法上認められています。ただし代行業者等の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認められておりません。